国語科教員養成課程で出会う『枕草子』(2)

坂東　智子

“The Pillow Book” as Teaching Materials for a Teacher Training course in *Kokugo* [National Language](2)

BANDO Tomoko
（Received August 6, 2014）

キーワード：伝統的な言語文化の指導、枕草子、高校教材、国語科教員養成課程

はじめに

枕草子にはさまざまな伝本が存在している[1)]。本稿ではそれらの伝本のうち、原型に最も近いとされる三巻本を底本としたテキストを用いる[2)]。三巻本137段「殿などのおはしまさで後、世の中に事出で来」（以下本稿では、「殿などのおはしまさで後」とする）は、中宮定子の父道隆没後の中関白家にかかわる政変と定子後宮の不遇に触れたほとんど唯一の章段である。現実の暗の部分を描くことの少ない枕草子の日記的章段の中でも、特に注目されてきた一段である[3)]。段の年時に関しては、赤間恵都子（2009）がこれまでの先行研究を整理した上で、道隆薨去からおよそ２年ほど経た、長徳２年（997）秋から翌３年春のことであろうと推定している。この時期、清少納言は中関白家と敵対する道長方に通じているのではないかと疑われ、長い間里居を続けていた。この里居のうちに枕草子の一部が執筆されたと考えられており、そういった意味でも重要な一段である[4)]。

平成27年度使用の高等学校国語教科書のうち、「殿などのおはしまさで後」を採録しているのは、『古典文学選　古典Ａ』（17教育出版、古典Ａ302）と『高等学校　古典Ｂ　古文編』（15三省堂、古典Ｂ304）である。２冊とも、冒頭に「この草子、目に見え心に思ふ事を、人やは見むとすると思ひて、つれづれなる里居のほどに、書きあつめたるを」とある跋文も採っている。前者は、『大鏡』から「道長と隆家」を、後者は、「伊周・隆家」を採録している。これらを関連づけて学習することで、枕草子の成立事情や記事の歴史的背景をも発展的に学ぶことができる編集のくふうがなされていると考えられる。

筆者は、平成24年、25年の「国文学演習Ⅱ・国文学Ⅱ演習」（後期、学部２年）で、枕草子を演習教材とした授業を行っている[5)]。演習箇所は章段順ではなく道隆生存中の中関白家隆盛期と薨去後の不遇期に分け、推定される記事年次順に日記的章段から教員が選定した。「殿などのおはしまさで後」は、両年ともに演習箇所とした。理由は、中関白家の明暗と枕草子に描かれた世界の関係を考え、枕草子の本質に迫るためには欠くことのできない章段だからである。24年度と25年度は使用したテキストが異なっていた。そのこともあってか演習を担当したグループが作成した発表資料の内容にかなり大きな違いがみられた。本稿執筆の動機は、それが何に起因するのかを探り本年度の授業改善の方向を見定めたいと考えたことである。

本稿では、作品世界の背後にある歴史的事実についての理解の深浅が、描かれた作品世界そのものの理解と鑑賞にどう関わるのか、それは国語科教員養成課程における枕草子日記的章段を対象とした演習授業に必要な要件であるのか否かについて焦点化して検討を行う。方法としては、これまでの古典文学研究の成果に学びそれらを整理するとともに、『日本紀略』や『小右記』などを典拠とした枕草子年表や、『大鏡』『栄花物語』といった枕草子が書かれた時代の歴史物語、『無名草子』などの評論の関連箇所に触れ、該当章段の歴史的背景を詳らかにした後に、授業で演習を担当したグループの発表資料を考察対象にして、先の課題の検討をすすめる。それをもとに、今後の授業改善の具体的な方途を見出していきたい。

１．「殿などのおはしまさで後」の歴史的背景

１－１　「世の中に事出で来」について

本章段の冒頭部に、道隆薨去後の政変と中宮の内裏退出が記されている。（下線は筆者が付記）

> 殿などのおはしまさで後、世の中に事出で来、さわがしうなりて、宮もまゐらせたまはず、小二条殿といふ所におはしますに、何ともなくうたてありしかば、久しう里にゐたり。御前わたりのおぼつかなきにこそ、なほえ絶えてあるまじかりける。
>
> （現代語訳）関白殿がおなくなりになってから、世の中に事件が起り、騒がしくなって、中宮様も宮中にお入りあそばされず、小二条殿という所においでになるのだが、何ということもなくいやな気分だったので、私は長い間里にじっとしていた。でも、中宮様の御前のあたりが気がかりで、やはりご無沙汰を続けていることができそうにもなかったのだった[6)]。

「世の中に事出で来」が政変に直接触れた記述である。枕草子では、現実に起こった様々な事件はこの短い一節でのみ語られている。田中重太郎（1978）の語釈をもとに詳細を明らかにしてみよう。

「殿（能因本には故殿）」は、藤原道隆。長徳元年（995）４月10日薨去。155段「故殿の御服のころ」も同年の記事である。田中は『春曙抄』の次の一節を引用し語釈としている。

> 関白道隆公薨じ給ひて、御堂殿関白し給ひしに、道長公道隆公と兄弟の御仲よからざるにそへて、伊周公も下心いどみがちにありしに、伊周公其の時太上天皇花山院を、由なき恨にて射奉らんとし給ひしつみ、又禁中ならでは行はせ給はぬ大元帥ノ法を、伊周公年ごろおこなひ給へるつみ、又其比の女院東三条院をのろひ給へりと云ふ罪などにて長徳二年四月太宰府権帥に左遷し給へり。御弟の隆家卿も、花山院をゐ（田中注・射〔い〕ノ誤）給はんとせしつみありとて、出雲へ配流せり。后宮定子は此御恨にて御ぐしおろして、籠りおはす由、栄花物語三四の巻大鏡にも見ゆ[7)]。

道隆の死後、政権は道隆の弟道兼へわたったが、道兼が疫病でおよそ一月後に没し道長が関白となる。道長公と定子の父道隆の兄弟仲がよくなかったために道隆の息子である伊周も道長に反抗心を抱き挑みがちであった。その後、伊周・隆家の従者が花山院を射るという事件があり、伊周・隆家は失脚、流罪となる。中宮も謹慎となり、一旦は落飾された。これは栄花物語や大鏡に記述が見えるものである、といった内容である。『春曙抄』は、栄花物語を核にして「事」の概略をまとめたと考えられる。

１－２　背景となる史実について　―枕草子年表、枕草子総合年表より―

「枕草子年表」[8)]、「枕草子総合年表」[9)]を参考にして枕草子の関連章段と背景となる史実を整理する。

表１　関連章段と背景となる史実

年　号	西暦	月日	主　要　事　項（年齢）〔典拠〕
正暦四	993		初春または初冬に清少納言(28)、中宮定子(17)のもとに初出仕する。 86段「宮の御節出ださせたまふに」、177段「宮にはじめてまゐりたるころ」
正暦五	994	春 夏	21段「清涼殿の丑寅の隅の」 293段「大納言殿まゐりたまひて」 この年から長徳二年四月までの間に跋文
長徳元	995	4/10 7/24 7/27 8/2 8/10	入道前関白道隆（43）薨去〔日本紀略・公卿補任・小右記・栄花・大鏡〕 内大臣伊周、右大臣道長と杖座で口論「あたかも闘乱の如し」〔小右記〕 中納言隆家の従者、右大臣道長の従者と七条大路にて闘乱〔小右記〕 中納言隆家の従者、道長の随身を殺害〔小右記・百練抄〕 高階成忠、陰陽師をして道長を呪詛「伊周の所為に似たり」〔百練抄〕
長徳二	996	1/16 2/25 3/4 4/24	伊周・隆家故為光一条第にて夜更けに従者をして花山院に弓を引き御童子二人を殺害〔小右記・日本紀略・百練抄・野略抄〕 中宮、梅壺より職曹司へ遷御 79段「返る年の二月二十余日」 中宮、職曹司より二条北宮に遷御〔小右記〕 内大臣伊周(23)を太宰権帥に、中納言隆家（18）を出雲権守に貶す〔日本紀略〕伊周病により配所に赴き難きを申すも勅許せず早く下向すべきを重ねて

			仰せ下す〔小右記〕伊周らの配流宣命に「宮の内の上下、声をとよみみ泣きたる」〔栄花物語〕
		5/1	中宮落飾〔日本紀略・百練抄・小右記・権記〕中宮自ら鋏を取って薙髪〔栄花物語〕 伊周・隆家中宮の御所に潜伏。宣旨により官人・宮司ら夜御殿の戸を撤破するに隆家を拘束するも伊周逃去〔小右記〕中宮御所夜御殿の扉はなはだ厚く官人および宮司等忽ち破ること不能により戸腋の壁板を突破して扉を開く。女人は悲泣連声。中宮乗車後に夜御殿内を捜索。母貴子敢て隠れ忍ばず。見る者は嘆き悲しむ〔小右記〕隆家網代車にて配所に向う。勅使相送る。途中皇嘉門下で車を止め出家し京に留まることを奏すも勅許なく遂に謫所に向かう。「見る者は雲の如し」〔小右記・日本紀略〕出雲権守隆家病により丹後国に逗留の由を領送使右衛門尉藤原陳泰言上〔小右記〕伊周逃亡により宮司ら御所など捜すも既にその身無し〔小右記〕
		5/4	伊周春日社より帰京し謫所に赴く。勅使相送る〔日本紀略〕伊周の網代車内に女法師貴子もありと左衛門権佐惟宗允亮申す〔小右記〕
		5/5	伊周・母貴子同行を禁ずる宣旨〔小右記〕
		5/15	伊周・隆家病により共に配所に赴かぬことを領送使言上〔小右記〕伊周を播磨に、隆家を但馬に留めしむ。
		6/8	定子二条宮今夜焼亡。定子は侍男に抱えられ二位法師高階成忠宅に渡り更に乗車し高階明順二条宅へ移御〔日本紀略・小右記〕137段「殿などのおはしまさで後」
		7/20	大納言藤原公季の女義子（弘徽殿）入内、八月九日に女御となる〔小右記〕
		10/7	但馬国逗留出雲権守隆家の「左降人請帰京」と題し哀憐を蒙って帰京し名医について一身の病気治療と母貴子の病気見舞いを請う奏状あり〔扶桑略記・本朝文粋〕外祖父高階成忠が代作。貴子「六旬之老母」とある〔本朝文粋〕
		10/8	権帥伊周密々上京し中宮御所に潜伏との噂あり中宮に右衛門権佐源孝道を派遣し真相を問うに無実を奏せりと〔小右記〕伊周上京を密告する者に中宮大進生昌ありと道長が実資に談説〔小右記〕平孝義・平倫範も密告〔小右記・日本紀略〕
		10月	故関白道隆の室、高階貴子薨（43才位か）
		12/16	中宮、第一皇女、侑子を御産。翌年侑子は内親王になる。
長徳三	997	3/25	東三条院御悩により大赦。太宰権帥伊周と出雲権守隆家の特赦ご合議〔小右記・扶桑略記・日本紀略・百練抄〕
		5/13	出雲権守隆家入京〔扶桑略記〕
		12月	太宰権帥伊周入京〔公卿補任・栄花物語〕
長保元	999	11/1	左大臣道長の女従三位彰子（12）入内
		11/7	定子前但馬守生昌三条第にて第一皇子敦康御産〔小右記・日本紀略〕従三位彰子女御となす宣旨下す〔道長公記〕
長保二	1000	4/18	敦康親王宣下〔権記・日本紀略〕
		12/15	皇后定子、前但馬守生昌第にて第二皇女媄子御産〔日本紀略〕
		12/16	皇后定子、生昌第にて崩御〔権紀・日本紀略・扶桑略記他〕

「世の中に事出で来、さわがしうなりて」と記されていた背景にはこのような現実があった。特に、伊周と隆家が謫所（配流先）に赴くまでの、母貴子、定子の動転し取り乱す様は胸に迫るものがある。栄華を極めた一族がまさに坂を転がるが如くに衰えていったのである。父道隆の死が、伊周22歳、定子20歳、隆家17歳の時であった。伊周は当時内大臣、隆家中納言にあったが、それは権門に生まれ、父の後ろ盾、一条天皇の定子への寵愛があったればこその官位であったといえよう。名門の貴公子たちの脆弱さ、情に溺れ自制する心を失った高貴な女人の憐れさが史実を表にしただけでも見えてくる。

１－３　歴史物語における伊周・隆家・道長　―山口県立西京高等学校平成26年度採択教科書より―

山口市の西京高等学校が平成26年度に採択した『古典Ａ』（21東京書籍、古典Ａ301）には、大鏡から「隆家と道長」「東三条院と道長」、栄花物語から「伊周・隆家の配流」が採録されている。枕草子「殿などのおはしまさで後」の掲載はないものの、史実よりさらに詳しい事情が分かる。

（１）「隆家と道長」（大鏡）

『古典Ａ』（21東書）「隆家と道長」を引用する。本文は教科書に拠った[10]。（下線は筆者が付記）

> この帥殿の御一つ腹の、十七にて中納言になりなどして、世の中のさがな者といはれ給ひし殿の、御童名は阿古君ぞかし、この兄殿の御ののしりにかかりて、出雲権守になりて、但馬にこそはおはせしか。さて、帥殿の帰り給ひし折、この殿も上り給ひて、もとの中納言になりや、また兵部卿などこそは聞こえさせしか。それも、いみじう魂おはすとぞ、世人に思はれ給へりし。
>
> あまたの人々の下臈になりて、かたがたすさまじう思されながら歩かせ給ふに、御賀茂詣でに仕うまつり給へるに、むげに下りておはするがいとほしくて、殿の御車に乗せ奉らせ給うて、御物語のこまやかなるついでに、「『一年のことは、おのれが申し行ふとぞ、世の中に言ひ侍りける。そこにもしかぞ思しけむ。されど、さもなかりしことなり。宣旨ならぬこと、一言にても加へて侍らましかば、この御社にかくて参りなましや。天道も見給ふらむ。いと恐ろしきこと。』とも、まめやかにのたまはせしなむ、なかなかに面置かむ方なく、術なくおぼえし。」とこそ、後にのたまひけれ。それも、この殿におはすれば、さやうにも仰せらるるぞ。帥殿には、さまでもや聞こえさせ給うける。
>
> この中納言は、かやうにえ避り難きことの折々ばかり歩き給ひて、いといにしへのやうに、交じろひ給ふことはなかりけるに、入道殿の土御門殿にて御遊びあるに、「かやうのことに、権中納言のなきこそ、なほさうざうしけれ。」とのたまはせて、わざと御消息聞こえさせ給ふほど、杯あまた度になりて、人々乱れ給ひて、紐おしやりて候はるるに、この中納言参り給へれば、うるはしくなりて居直りなどせられければ、殿、「疾く御紐解かせ給へ。こと破れ侍りぬべし。」と仰せられければ、かしこまりて逗留し給ふを、公信卿、後ろより、「解き奉らむ。」とて寄り給ふに、中納言御気色悪しくなりて、「隆家は不運なることこそあれ、そこたちにかやうにせらるるべき身にもあらず。」と、荒らかにのたまふに、人々御気色変はり給へる中にも、今の民部卿殿はうはぐみて、人々の御顔をとかく見給ひつつ、事出で来なむず、いみじきわざかなと思したり。入道殿、うち笑はせ給うて、「今日は、かやうの戯れごと侍らでありなむ。道長解き奉らむ。」とて、寄らせ給ひて、はらはらと解き奉らせ給ふに、「これらこそあるべきことよ」とて、御気色直り給うて、さし置かれつる杯取り給ひてあまた度召し、常よりも乱れ遊ばせ給うけるさまなど、あらまほしくおはしけり。殿も、いみじうぞもてはやし聞こえさせ給うける。【内大臣　道隆】

隆家は、長徳元年（995）４月に非参議から権中納言に、同年６月には中納言になる。「世の中のさがなもの」とは、手に負えぬ人という意。弱冠17歳での希にみる栄進であった。それが、兄伊周の事件に連座して、出雲へ配流となる。許されて帰京し、権中納言に再任されたのは６年後のことである。左遷されている間にいく人もが隆家の官位を越えていった。「すさまじう」思うのも無理ないことである。「隆家は不運なることこそあれ、そこたちにかやうにせらるるべき身にもあらず。」は、隆家の鬱屈した思いが噴出した言葉であろう。道長は当時35歳ごろか。隆家より伊周に拘りを残し風当たりが強かった。この当たりの事情は、次節の「東三条院と道長」に少し詳しい記述がある。

（２）「東三条院と道長」（大鏡）

同じく『古典Ａ』より、「東三条院と道長」の冒頭部[11]を引用する。（下線は筆者が付記）

> 女院は、入道殿を取り分き奉らせ給うて、いみじう思ひ申させ給へりしかば、帥殿は、うとうとしくもてなさせ給へりけり。帝、皇后宮をねんごろに時めかさせ給ふゆかりに、帥殿は明け暮れ御前に候はせ給ひて、入道殿をばさらにも申さず、女院をもよからず、ことに触れて申させ給ふを、おのづから心得やせさせ給ひけむ、いと本意なきことに思し召しける、理なりな。入道殿の世をしらせ給はむことを、帝いみじうしぶらせ給ひけり。

次頁の図１は、教科書に示された【参考略系図】である。

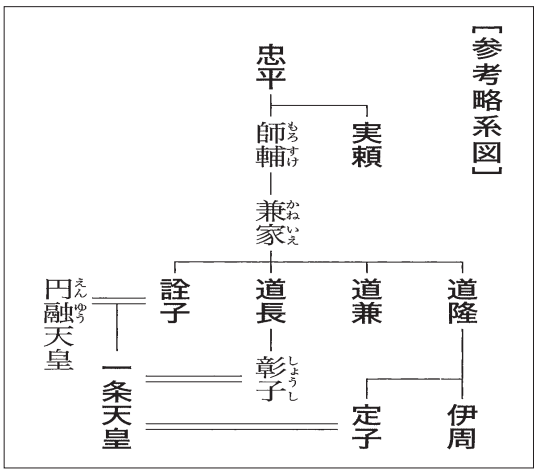

図１　参考略系図

女院とは、藤原詮子。東三条院と呼ばれた。円融天皇の女御であり、一条天皇の母。道長の姉。伊周の叔母にあたる。女院は兄弟の中でも特に入道殿（道長）に目をかけていた。帥殿（伊周）は女院に対してよそよそしい態度であった。一条天皇は中宮定子を心から寵愛しておられた関係から伊周はいつも天皇のお側に伺候していて、入道殿や女院のことを何かにつけて悪し様に申していた。これが女院の耳にも入り、女院は伊周にあまりよい感情を抱いていなかったのであろうか、道隆薨去後、道兼も疫病で没し、その後、道長に関白の宣旨が下されるにあたって、女院の口添えが大きく働いたという事情が語られている。表向きの政治には女性は関与しない。が、この場面のように、渋る天皇を泣きながら説得するといった裏工作に、母や妻である女性の力が働いた例は多かったのであろう。道長と伊周の不仲は道隆生存中からのものであったことが分かる。決定的な事件が起こるずっと以前から、栄耀栄華の最中に一族の背後に滅びの影がさしていたのである。

（３）「伊周・隆家の配流」（栄花物語）

『古典Ａ』には、『栄花物語』「伊周・隆家の配流」が採録されている。リード文と冒頭部、次の場面を引用する[12]。（下線は筆者が付記）

（リード文）摂政・関白藤原道隆の子、伊周は中宮定子の兄であり、二十一歳の若さで内大臣となった。長徳元年〔九九五〕四月、父道隆が病死し、危機感を持った伊周は、秘法を行わせるなどして権力の維持を願ったが、思いどおりにいかなかった。疫病の流行で、有力な人物が次々と世を去るなか、藤原道長が徐々に頭角を現し、長徳元年六月、ついに右大臣となった。一方、伊周は藤原為光の三の君に通っていたが、四の君に通っていた花山院を誤解し、弟の隆家とはかり、矢を射かけるという過ちを犯してしまった。これをきっかけに、伊周には数々の不法があったとされ、ついに配流の命が下った。

かかるほどに、この乱れがはしき者の中をかきわけ、さすがにうるはしく装束きたる者、南面にただ参りに参りて、こは何にかと思ふほどに、宣命といふもの読むなりけり。聞けば、「太上天皇を殺し奉らむとしたる罪一つ、帝の御母后を呪はせ奉りたる罪一つ、朝廷よりほかの人いまだ行はざる大元法を、私に隠して行はせ給へる罪により、内大臣を筑紫の帥になして流し遣はす。また、中納言をば出雲権守になして流し遣はす。」といふことを読みののしるに、宮の内の上下、声をとよみ泣きたるほどのありさま、この文読む人もあわてたり。検非違使どもも涙を拭ひつつ、あはれに悲しうゆゆしう思ふ。そのわたりに近き人々みな聞きて、門をば鎖したれど、この御声にひかれて涙とどめ難し。（中略）

配流の宣命は三つの罪により下された。「花山法皇を射たる事、女院（東三条院）を呪咀したる事、大元帥の法を私に行ひたる事」の罪による。伊周の女院に対する恨みの原因は、前節「東三条院と道長」に詳しい。宣命は大声で読まれた。第内にいる身分の高い者も低い者も、声をわっと立てて泣いた。この有様には、宣命を読む人もあわてたとある。泣き声は、近隣にも響きわたる。漏れ聞こえる声に誘われて人々も涙をとどめることができない。この後、伊周は御叔父の明順と供一人を連れ邸を抜け出す。木幡にある父道隆の墓に詣でるためであった。伊周は翌日邸に帰ってきた。

（リード文）邸宅を出た伊周は木幡にあった父道隆の墓に詣で、自分や定子への加護を訴えた。続いて北野神社に行き、夜明けを迎える。夕方になり、厳しい探索が続いていた自邸に伊周は戻って来た。

御車、御門のもとにてかき下ろして、内大臣殿降りさせ給ふ。検非違使どもみな下りて土に並み居たり。見奉れば、御年は二十二、三ばかりにて、御かたち整ほり、太り清げに、色合ひまことに白くめでたし。かの光源氏もかくやありけむと見奉る。薄鈍の御衣の綿薄らかなる三つばかり、同じ色の御単の御衣、御直衣、指貫同じさまなり。御身の才もかたちも、この世の上達部にはあまり給へりとぞ人聞こゆるぞかし、あたらものを、あはれに悲しきわざかなと見奉るに、涙もとどめ難くてみな泣きぬ。乗りながらも入らせ

給はで、宮のおはしませば、我一人はなほかしこまり給へるもいと悲し。さておはしぬれば、「帥、木幡に詣られたりける、ただ今なむ帰りて候ふ。」と奏せさすれば、「むげに夜に入りぬれば、今宵はよくまぼりて、明日の卯の時に。」とある宣旨あれば、夜一夜寝も寝で立ち明かしたり。宮の御前、母北の方、帥殿、一つに手をとり交はして惑はせ給ふ。

はかなくて夜も明けぬれば、今日こそは限りと、誰々も思すに、立ち退かむとも思さず、御声も惜しませ給はず。「いかにいかに、時なりぬ。」と責めののしるに、宮の御前、母北の方、つととらへて、さらにゆるし奉らせ給はず。かかるよしを奏せさすれば、「几帳ごしに宮の御前を引き放ち奉れ。」と、宣旨頻れど、検非違使どもも人なれば、おはします屋には、えもいはぬ者ども上りたちて、塗籠を割りののしるだにいみじきを、またいかでか宮の御前の御手を引き放つことはあらむと、いと恐ろしく思ひ回して、「身のいたづらにまかりなりて後は、いと便なかるべし。疾く疾く。」と責め申せば、ずちなくて出でさせ給ふに、松君いみじう慕ひ聞こえ給へば、かしこくかまへて率て隠し奉りて、御車に柑子、橘、御御器一つばかり御餌袋に入れて、中納言は筵張りの車に乗り給ふ。宮のおはしますをいとかたじけなく思せど、宮の御前、母北の方も続き立ち給へれば、近う御車寄せて乗らせ給ふに、母北の方やがて御腰を抱きて、続きて乗らせ給へば、「母北の方、帥の袖をつととらへて乗らむと侍る。」と奏せさすれば、「いと便なきことなり。引き放ちて。」とあれど、離れ給ふべき方見えず。ただ山崎まで行かむ行かむと、ただ乗りに乗り給へば、いかがはせむ、ずちなくて御車引き出だしつ。長徳二年四月二十四日なりけり。【巻第五】

御車から降りた伊周の姿は、「御年二十二、三程で、御容姿がととのい、でっぷりとふとって一見耀くばかり美しく」「あの光源氏もこんなであったろう」というほど美しかった。「学才も御容姿も地上世界の上達部としては度を越えている」ほどにすばらしい。惜しむべき人が、このようになって、見る人は涙をとどめ難い。出発は明朝との宣旨である。中宮、母北の方、帥殿（伊周）の三人は手をとりあって夜を明かす。いよいよ出発の時。母北の方は、伊周の腰に抱きついて一緒に車に乗ってしまう。まさに愁嘆場である。

「殿などのおはしまさで後」冒頭部の背景を、史実、歴史物語の順にたどってきた。『栄花物語』に書かれたものが事実、現実そのものかというとそうではない。松村博司（1971）は次のように記す。

> 伊周兄弟左遷事件の経過については、『小右記』長徳二年四月から五月にかけて詳しく記されている。噂の聞書も混ってはいるが、ほぼ事実を伝えているのではないかと思われる（ただし、伊周が愛宕山に行方をくらましたことは相当詳しく記されているが、噂であったかもしれず、『日本記略』に、五月四日になって伊周が春日社から帰京したと記されていることの関係も明らかでないから、『小右記』がすべて事実を伝えているとも限らないようである）。『栄華物語詳解』は、『小右記』と対比した上で、「本書と日次たがひ、いさゝか、おもぶきのかはれるところあり。されど本書は、小右記の如き日記にあらねば、筆のついでによりて、日次にかゝはらず、かきつづけたるもあるべく、はた、小右記とても、親しく見たるまゝを記せるのみにあらず、伝聞のまゝを記したるもあめれば、記事に小異あるは、強ち本書のみ、誤れるにもあらじ。其可否は、いづれにもあるべくなむ」と注している。しかし、本書と『小右記』その他の記録とを対照すると、細部の叙述において一致するところもあるが、本書は全面的に自由に改変し、物語的叙述を行っていることが明らかである[13)]。

上の引用部は、本稿で行ってきた、『枕草子』、史実、『大鏡』『栄花物語』を関連付けて読もうとする場合の注意点でもある。国語科の教員を目指す学生達にとっては、どの書物も、例え日記や歴史書であってもそこに書かれたもの全てが事実というわけではないこと、書き手の取捨選択や再構成がなされていることを、常に念頭に置いていなければいけないと知るよい機会となるにちがいない。

「殿などのおはしまさで後」を対象に、枕草子に描かれた世界と描かれなかった世界との関係を具体的に明らかにしてきた。この問題は、枕草子の執筆動機、主題と関わる重要な問題であることがより明瞭になったと考えている。

（4）『無名草子』の枕草子評

鎌倉時代の『無名草子』は、枕草子が古典として論じられる時代の最も早い評論とされている。

また、人、「すべて、余りになりぬる人の、そのままにて侍る例、ありがたきわざにこそあめれ。

檜垣の子、清少納言は、一条院の位の御時、中の関白世を治らせ給ひけるはじめ、皇太后宮の時めかせ給ふ盛りにさぶらひ給ひて、人より優なる者とおぼしめされたりけるほどのことどもは、『枕草子』といふものに、みづから書きあらはして侍れば、こまかに申すに及ばず。

歌詠みの方こそ、元輔が女にて、さばかりなりけるほどよりは、すぐれざりけるとかやとおぼゆる。『後拾遺』などにも、むげに少く入りて侍るめり。みづからも思ひ知りて、申し請ひて、さやうのことにはまじり侍らざりけるにや。さらでは、いといみじかりけるものにこそあめれ。

その『枕草子』こそ、心のほど見えて、いとをかしう侍れ。さばかりをかしうも、あはれにも、いみじくも、めでたくもあることども、残らず書き記したる中に、宮のめでたく盛りに時めかせ給ひしことばかりを、身の毛も立つばかり書き出でて、関白殿失せ給ひ、内大臣流され給ひなどせしほどの衰へをば、かけても言ひ出でぬほどのいみじき心ばせなりけむ人の、はかばかしきよすがなどもなかりけるにや、乳母の子なりける者に具して、遙かなる田舎にまかりて住みけるに、青菜といふもの乾しに外に出づとて、「昔の直衣姿こそ、忘れね」と独りごちけるを見侍りければ、あやしの衣着て、つづりといふもの帽子にして侍りけるこそ、いとあはれなれ。まことに、いかに昔恋しかりけむ」など言へば、[14)]

上の引用部も、演習全体を通しての関連資料として提示したいものである。

下線部は、清少納言が、枕草子に中関白家の栄えていた時のことばかりを恐ろしくなるほどまざまざと書いて、伊周配流のことなど没落の様子はまったく書き記さなかったことに対して、「いみじき心ばせなりけむ人（なみなみでない気概をもったゆき届いた心くばりの人）」との賛意を表した部分である。枕草子が史実をどう扱ったかということは、鎌倉時代から現在に至るまでの、枕草子研究の主要なテーマであることがこの資料から実感されるであろう。しかし、次のような考えもあることを視野に入れておく必要がある。

> 一条朝の歴史には、定子後宮の没落という決定的な事実がある。そのため、この要因を中心に据える視座から『枕草子』という作品を読み解こうとするのが従来の通例となっている。しかし、日記的章段のよみにおいて、その本文上に描かれている場面から、描かれていない暗部をことさら冷徹な目でよみ取ろうとすることは、『枕草子』の湛えるみずみずしい文学性の感受を妨げる大きな要因になっていると思われる[15)]。

確かに、「描かれている場面」「表現そのもの」から読むことが何といっても基本である。しかし、いずれの校種の国語科教員になるにしても、枕草子の本質を理解しその文学性を感受するためには、「描かれたもの」と「描かれていない」ものを重ねあわせて読む経験が必要なのではなかろうか。

２．演習発表資料の考察

２－１　平成24年度演習発表資料について

平成24年度に「殿などのおはしまさで後」を担当したグループメンバーは７名、11月15日（木）に発表を行った。24年度使用テキストは、池田亀鑑校訂『枕草子』（岩波文庫）。新編日本古典文学全集『枕草子』（小学館）は参考テキストとして貸し出した。グループのメンバーが女性ばかりであったためか、右中将（源経房）が訪れた際に語った小二条殿で中宮のお側に仕える女房たちの装束の色目や、牡丹、梔、山吹の花の色に興味を持ったということで、カラー刷りの資料３頁を含む、全20頁の資料が配付された。

資料の内容（概要）を次にまとめる。（発表者の資料をもとに筆者がまとめた）

・表紙
・人物について……清少納言、中宮定子、右中将、女房、宰相の君、長女
・用語解説……関白殿など、世の中に事出で来、小二条殿など
・本文、現代語訳
・教材分析

（問題意識）この章段では、まず中宮定子の身の回りに生じた数々の事件が背景にある。筆者である清少納言が道長側の人間であるとの噂が立ち、女房の中でも疎外される。そのショックのあまり宮廷を去り、居場所を隠したまま引きこもってしまう。そんな清少納言に、居場所を知った右中将は宮廷での定子の様子を伝えたり、戻ってくるよう促したりするが、戻る気配は見られなかった。

そんな時、宰相の君を介して、定子から手紙が届く。それがきっかけで清少納言は定子の元に戻る決意をする。ここで、手紙について考察してみたい。

①定子からの手紙に添えられた山吹のはなびらについて

1）花びらが本物か偽物かについて

説一　紙や絹でつくられた偽物の花びらである

説二　秋の返り咲き

説三　本物の春に咲いた山吹

2）山吹の花びらを選んだ理由

山吹の色は、くちなしの花で染色をした色と似ている。

「くちなし＝口無し」、「言はで思ふぞ」と関連させたのだろう。

②清少納言の人物像

1）強気で自慢めいた性格……これは清少納言の性格としてよく知られている一面である

2）弱気な性格……この章段には清少納言自身が女房に陰口を言われるという場面が記されている
それによって傷つき悲しんだという訴えも込められているように感じられる

③様々な事件が生じるが、それでも揺るがない清少納言の定子に対する敬慕、また定子の清少納言に対する寵愛の格別さ、その強いきずなも感じることの出来る章段である。

・時代背景
・女子の装束（中古）
・関連資料　和歌　山吹の花色衣ぬしや誰問へどこたえずくちなしにして（古今集）
わがやどの八重山吹は一重だに散り残らなむ春のかたみに（拾遺集）
心には下ゆく水のわき返り言はで思うぞ言ふにまされる（古今和歌六帖）
・「まんがで読破　枕草子」（イーストプレス）
・傍注テキスト
・授業略案、ワークシート、板書計画

次に示す図２、図３は、上の資料中にあった「まんがで読破　枕草子」の一部と時代背景である。

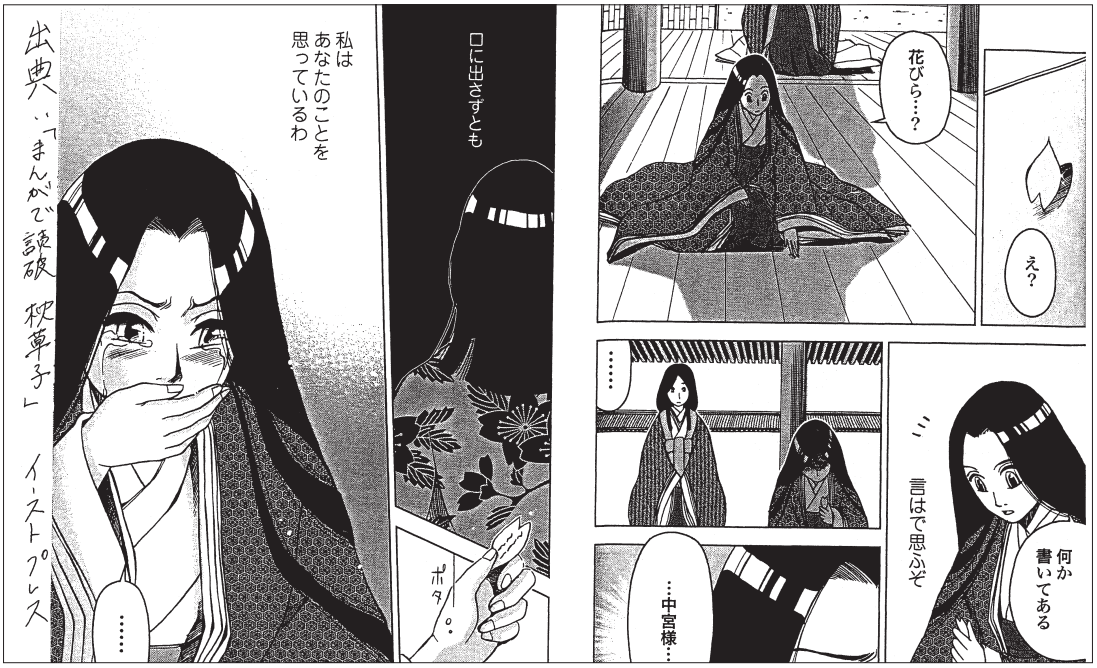

図２　「まんがで読破　枕草子」[16] の一部

図２の「まんがで読破　枕草子」は、筆者も授業後に読んでみた。清少納言の長期里居の背景についてかなり詳しく書かれたものであった。おそらくこれも、栄花物語や大鏡を踏まえて書かれたものであろう。枕草子の本質に迫るための、手助け、一つの方法となると感じた。

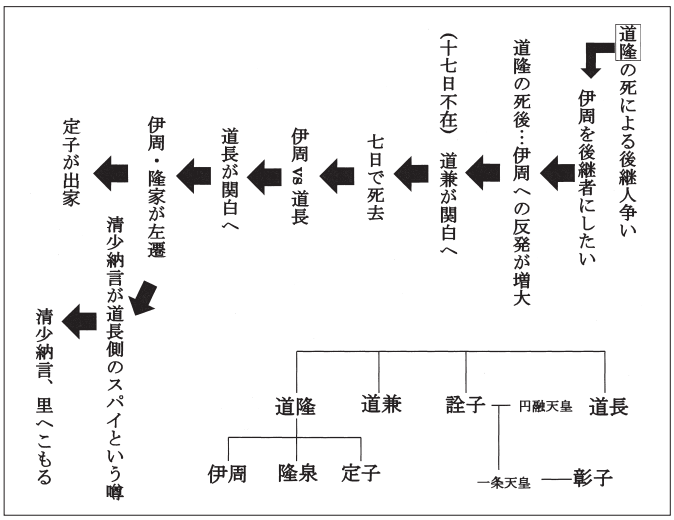

図３　時代背景（平成24年度演習発表資料から）

平成24年度は、章段全体を演習対象としたため、冒頭部「事出で来」について、関連資料を参考にして図３が作成されたものと考えられる。

丁寧に背景となる史実を押さえることで、枕草子本文の理解の質が変わってくる。例えば、冒頭部に続く「何ともなくうたてありしかば、久しう里にゐたり。御前わたりのおぼつかなきにこそ、なほえ絶えてあるまじかりける。」の読みが変わってくる。中宮様がどのようにお過ごしか、気がかりでならず、このまま里居を続けて出仕しないでいることはできないと思われたという、清少納言の心情は、先の栄花物語を読んでいれば、すんなり共感できる。

２－２　平成25年度演習発表資料について

平成25年度に「殿などのおはしまさで後」を担当したグループメンバーは４名、11月21日（木）に発表を行った。25年度使用テキストは、ビギナーズ・クラッシックス日本の古典『枕草子』（角川書店）。新編日本古典文学全集『枕草子』（小学館）は24年度と同様に参考テキストとして貸し出した。グループのメンバーは男性ばかりであった。全18頁の資料が配付された。

資料の内容（概要）を次にまとめる。（発表者の資料をもとに筆者がまとめた）

・表紙
・登場人物解説……清少納言、中宮定子、宰相の君
・藤原氏系図
・用語解説……長女、人づての仰せ書き、日ごろの絶え間、御几帳、あまりあなづる古ごとなど
・本文、現代語訳
・教材分析
　①内容……道隆の没後、清少納言などの中宮定子側の人々が受けた不遇な扱いについて触れたほとんど唯一の章段である。関白殿が亡くなってから長らく里に下がっていた清少納言のもとに中宮定子から手紙が届く。恐る恐る開けてみると、中には何も書かれておらず山吹の花びらが一枚、その花びらに「いはで思ふぞ」とだけ書いてあった。その手紙に込められた自分に対する計り知れない思いやりの心、中宮定子自身も身の回りが大変なことになっているのに清少納言に対して気遣いをしてくれていることを感じ取り、感銘を受けた清少納言。この一件以来、清少納言と中宮定子の間の絆が深まったのではないかと言われている。
　②文中に出てきた和歌について
　　１）山吹の花に書かれていた「いはで思ふぞ」……素性法師「山吹の花色衣…」（古今集）
　　２）「いはで思ふぞ」に込められた意味
　③総じてこの章段では、最初の方に清少納言や中宮定子にふりかかった不遇の時期を表現しており、その中での清少納言と中宮定子の間の、言葉にしない心の交流が描かれており、そこで文章中には明記されていないような和歌での中宮定子から清少納言を気遣う心遣いが表現されていると考えられる。
・時代設定について……長徳２年ということは確実であるが、秋説と初夏説がある
・本文関連資料……『古今和歌集』と『古今和歌六帖』についての解説
・授業略案
・傍注テキスト

２－３　考察

24年度と25年度は使用したテキストが異なっていた。24年度の『枕草子』（岩波文庫）は三巻本を底本として校訂されたもので、脚注はあるが現代語訳はないものであった。そのため、担当グループは、冒頭部の

記述に着目し、時代背景をかなり詳しく調べた上で、簡易な図３にまとめたと考えられる。それに対して、25年度の『枕草子』（ビギナーズ・クラッシックス）は、主要な章段を抄出した入門書であった。全段が掲載されているわけではない。本章段も冒頭部はリード文にまとめられて、「例ならず、仰せごともなくて」以降から再出仕する所までの採録であった。現代語訳もあり、歴史的背景はわかりやすく解説がなされていた。受講者全員がテキストを持っており、詳しい背景についての資料は割愛したのであろう。

おわりに

本稿では、枕草子「殿などのおはしまさで後」の歴史的背景を、『日本紀略』や『小右記』、『大鏡』や『栄花物語』、さらには『無名草子』の関連箇所を参照し詳らかにした。その上で、平成24年度と25年度の演習発表資料を取り上げ、今後の授業改善の方向を探ってきた。

枕草子に描かれた世界だけでなく、その背後にある現実を、関連する文献を参照して理解することは、国語科教員を養成する過程においてやはり必要なことだと考える。本稿で、史実、歴史物語と背景を具にたどる過程で、筆者自身の本文の読みが変わるのを実感できた。ただ、この作業を演習担当グループだけに課すことは適当ではないと感じた。例えば、山口市の高校が使用する教科書から、関連資料を教員が作成し、他の文献も紹介しながら、枕草子の背景にある史実について講義をする時間を設けるのも一案かと考える。いきなり、大鏡、栄花物語と読み広げるのは、ハードルが高い。高校教科書から関連するものを取り上げることで、少しでも身近なものとして読むことができるのではないかと考える。本稿での検討をもとに、平成26年度の授業改善を行っていきたい。

引用・参考文献

１）速水博司：「伝本の形態とその特徴」『枕草子大事典』勉誠出版，62-102，2001．枕草子の諸本については、池田亀鑑博士による４系統２種類の分類がほぼ定説となっている。雑纂形態（三巻本系統諸本、伝能因所持本系統諸本）、類纂形態（堺本系統諸本、前田家本）である。雑纂形態の中でも三巻本が能因本より先に成立したと考えられている。類纂形態本は、再編集本と見られている。

２）松尾聰・永井和子校注・訳：『新編日本古典文学全集18　枕草子』小学館，1997．底本は三巻本系統第一類本の陽明文庫蔵本。本稿での枕草子本文の引用は全て新編日本古典文学全集による。

３）圷美奈子：「殿などのをはしまさでのち」（第一三八段）『枕草子大事典』，401-405.

４）赤間恵都子：『枕草子日記的章段の研究』三省堂，2009．赤間は「日記的章段を史実と対照させて読む研究方法は、昭和五十年代から始まり、今日まで様々な研究成果をもたらしてきた」（44）と述べ、「定子サロンに最も影響を及ぼした史実として、道隆薨去、伊周・隆家左遷事件、第一皇子（敦康親王）出産に伴う生昌邸移御」（48）を挙げて、日記的章段を四時期に区分して分析を行っている。

５）坂東智子：「国語科教員養成課程で出会う『枕草子』」山口大学教育実践総合センター研究紀要第37号，37-45，2014.

６）２）に同じ、259-260.

７）田中重太郎：『枕冊子全注釈三』角川書店，205，1978．『春曙抄』は北村季吟による江戸時代の枕草子注釈書。

８）岸上慎二編：「枕草子年表」所収２）に同じ、520-531.

９）浜口俊裕・原田来恵：「枕草子総合年表」所収１）に同じ、1053-1137.

10）三角洋一ほか：高等学校教科書『古典Ａ』（２東書　古Ａ301），東京書籍，88-91，2013．『大鏡』本文は『新編日本古典文学全集』に拠る。

11）10）に同じ、92.

12）10）に同じ、100-104．参考：松村博司『栄花物語全注釈（二）』角川書店，13-148，1971.

13）松村博司：『栄花物語全注釈（二）』48-49。

14）桑原博史：新潮日本古典集成（第七回）『無名草子』新潮社，109-111，1976･

15）３）に同じ、401.

16）バラエティ・アートワークス：『枕草子　まんがで読破』イースト・プレス，122-123，2011.